

# 2025茨城史料ネットの活動から

## —令和元年那珂川水害レスキュー史料から—

天明6年(1786) 6月、下国井村(現水戸市下国井町)の組頭(村役人を勤める有力農民)は怒っていた。本来は年に一度、田植え時に豊作祈願のため行う「天道念仏」を、村の若者たちが、庄屋の許可も取らずにたびたび催し、農作業に身が入らないのである。「天道念仏」とは、「百万遍念仏」とも言い、巨大な数珠を多人数で念仏を唱えながら繰り祈りを捧げる行事だが、若者たちは「念仏にカコ付け遊び候」というあり様であった。組頭たちは「毎度教訓を尽くし」たが聞き入れられない。「はなはだ不届き」「近年若者ども風儀もよろしからず」と怒り心頭である。遂に郡奉行所への提訴に踏み切ったのだ。

組頭たちの言い分もわからなくはないが、村役人が村の若者を訴え出たのだから、事は穏やかではない。一方で、若者たちの立場に立てば、数年前の飢饉(天明の大飢饉)の後、生活にはいろいろと制約も多かったろうし、「天道念仏」はそうした辛い日常から逃避できるひとときだったのだろう。若い男女の出会いの場だったのかもしれない。最近の国政選挙でも、現金給付か減税か、あるいは支持政党について、世代間の大きなギャップが明らかになった。江戸時代の村でも同じなのだ。歴史学は、これまで主に領主と農民といった階級間の対立に目を向けてきたが、今後は、地域社会のこうした世代間の軋轢にも、もっと目を向けていくべきだろう。

以上は、下国井村組頭が郡奉行所に提出した長文の願書から知ることができる、村の一事件だが、この古文書は、2019年に、突如われわれの目の前に出現したものである。同年10月の台風19号にともなう豪雨により、那珂川や久慈川の水系で氾濫が発生した。茨城大学からほど近い、那珂川左岸にも被害が出ているとの情報が寄せられ、茨城史料ネットが、水戸市立博物館とともに対応にあたり、この古文書と出会ったのである。床下浸水の被害を受けた旧家の納屋からは、段ボール箱数杯分の古い書類が運び出された。ネズミにひどく食い荒らされていたが、幸い水には漬かっていない。茨城大学に移し学生たちの協力を得て、一点一点を取り出し、クリーニング・目録取り・写真撮影といった一連の保全作業が開始された。この年の末からのコロナ禍による停滞を乗り越え、全1186点の整理を終えることができたのは、水害から足掛け7年を経過した、2025年の7月23日のことである。大学に運び込まれた時に作業にあたった学生は一人も残っていない。この日、古文書は、新たな寄託先となる水戸市立博物館に運ばれていった。

この古文書を伝えたのは、那珂川の堤防近くに屋敷を構え、下国井村の組頭を勤めた旧家である。そのため、家族の歴史とともに、先にみた願書のような、村の運営にかかわる公的な文書も残されていたのだ。村中を流れる用水路を渡す桁の拡充や、那珂川の洪水を防ぐ堤防普請のための「人足控帳」のような、水にかかわる史料も含まれる。歴史を通じて、豊かな水の恩恵を受け、時には溢れる水と戦ってきた集落の歴史の一端を、現代の水害を機にあらわれた古文書からうかがい知ることができた。

(高橋修「茨城論壇 村役人が激怒した理由」〔『茨城新聞』2025年8月23日朝刊〕より)



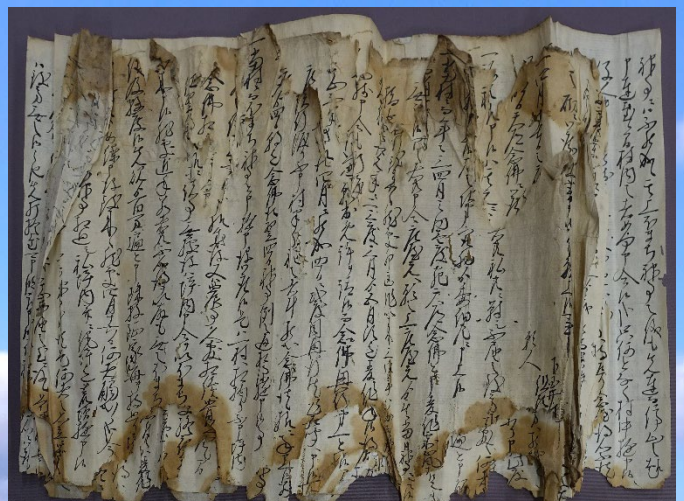
現地での古文書の取り出し



茨城大学での保全活動



茨城大学での保全活動



下国井村組頭等願書